

□千葉県の生活風景撮り続ける□



クジラ解体の記録
25年経て写真集に

小関 与四郎さん(75) 〓 匠瑤市出身 〓

九十九里浜に暮らす漁民 なんかばかり。中学卒業後、や成田空港建設に反対する 自転車店を手伝いながら千葉県民の姿など、千葉県の生活風景を60年近く撮り続けてきた。

「俺が撮るのは癒やしの写真じゃねえ。『あんたはどつ見る?』って現実を突きつけたいんだ」

4人きょうだいの末っ子 たき火を囲む半裸の女たちで、子どものころは海でけち…。「説明がなくても



筋肉をきしませ網を引く男たち、浜辺で生きる人々の飾らない姿を記録した写真集「九十九里浜」で日本写真協会の新人賞を受賞した。

1973年、漁村に学で、写真雑誌やコンクールに応募。

「現実を突きつきたい」

『すごいな』と思わせるのが良い写真。徹底的に現場を知らなければ撮れない」

商業捕鯨が停止されクジラの解体風景が見られなくなるらしいと聞き、86年1月、和田浦港に駆けつけた。「切り刻まれるクジラはかわいそうだと思っよ。でも、それで飯を食う人もいる。良い悪いでなく、そのままを撮りたかった」

その時の写真が25年後75歳になった今、本に。

「記録写真は時代が変わってから価値が出る。クジラを惨殺しているだけの写真ではなく、人間とは何かを考えさせる力があると思う」

自然の猛威や厳しい環境下で生きる人々にひたすら向き合ってきた。東日本大震災の後、日本が誇る沿岸捕鯨基地、宮城県石巻市の鮎川港に足を運んだ。漁師らに安易に励ましの言葉は掛けなかった。「絶望する人もいれば、はい上がる人もいるから」